

伊那谷スケッチ

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第二十四回



2014年11月下旬
野沢菜の収穫をする
下澤三男さん

前島久美

大河原集落にある小学校では、稲刈りシーズンに運動会が行われる。小渋川の対岸にある田んぼではおじさん、おばさんたちがお昼休み中。子供たちのにぎやかな声に励まされると、なんだか楽しそう。子育てを離れてから何十年、ひ孫もいるような人達と一緒に田畑で作業をしてみると、些細なことだけどこういった「エネルギー交流」が大切なんだと感じる。彼らは充実した稲穂と秋の空、そして子供たちの元気な掛け声をチカラに変えて大鹿の大地を耕している。かつて、幼かった私の声も対岸で作業するひと達を励ましていたのだろうか。

気になる背中

近所に住む下澤三男さん（81）は無口でいつもにこやか。手先が器用で日用品をよく作り、黙々と野沢菜畑、南天畑に立つ働き者だ。

6年前だったか、私がお酒の席で「休耕田

をもう一度田んぼに戻す！」などと勇ましく宣言した際、彼は笑いながらちょっと困ったように「そんなことやめるのかな」と言っていたような気がする。

翌年の春、彼は手製の「線引き」をプレゼントしてくれた。これは田植えの際に、植える位置が曲がらないようにするために線を

引く装置だ。ベニヤ板とふすまのリサイクルで、それは丁寧な仕事がかがえるものだった。以来、毎年使わせてもらっている。

この村で、田植え機が導入されたのは昭和30年代。何人かで組合をつくり導入したところがわずかにあったようだが、その頃のトレンドはまだまだ手植え。きれいに植えるためにはどうすればいいのか、各家々で試行錯誤されていたようだ。

私がいただいたのは戦後に、誰かが考案したものらしい。一気に6本の線が引けるすぐれものだ。

女高での暮らしぶり

下澤三男さんは昭和9年2月9日生れ。現在の鹿塩北入女高（おなたか）の出身。10人兄妹の6番目に育つ。女高は、谷間を縫うように走る一車線の国道152号線沿いにある集落で北は分杭峠を越えれば伊那市長谷という場所。36災害以前は、作道が上伊那郡の宮田村まで引かれていて、物流は盛んだったようだ。今は人は住んでいない。

この珍しい名前の集落は、日本のアルプスの魅力を世界に発信した宣教師であり登山家でもあったウォルター・ウエスンの目にも止まったようで、手記にも残っている。彼らの調べによると「ここで家長の地位を占めるのは女」ということから、この地名がついたというのだという。日本では当時、家父長制が主流だった。その時代に女性の権限が高い地域が日本の中でもしかもこの山奥で実施されていたことに驚いたのだろう。かなり先進的に映ったに違いない。

下澤さんの幼少時代はどんな生活だったのだろうか。

換金業は、炭、お蚕様。田畑は村内どこの集落もそうだが地形上限られており、主食は麦だったという。割合は1升の麦に米は3合。今の食事と比べると食べにくく、消化も悪かった。自給自足の生活において、製粉は近くを流れる女高沢を利用して。水車小屋を

2つ作り、12軒で共有していた。大体1日で30キロの穀物がこなせたという。家畜は、馬から牛へ時代と共に変わったようだが、馬の方が農作業においては扱いやすかったと話す。チカラがあって、人間と情が通いやすかったそうだ。

鹿塩の集落には、お正月はヤナギを飾るところがあると聞いていたが、女高の集落ではほとんどがヤナギを飾っていたという。ヤナギを飾るのは、京の文化だと聞いている。隣の伊那市長谷には、平家の落人集落と言われている浦（うら）という地域あるので、この辺りにも人は流れてきたのかもしれない。下澤さんの横顔に西の風を感じた。

現在、下澤さんはガンを患い自宅療養と病院での治療を繰り返している。年齢と共に重力や様々な要因に引っ張られて行くのは抗いようのないことだ。だけど、そのなかで私たちは自身の存在する空間を肉体的にも精神的にも見つけて行く。

下澤さんは、小学校を卒業してから働きに出た。興味があった学科は特にあったわけではないと話す。10人兄妹という大家族で「働きに出る」というのは、必然だったのだろうと思う。お話の中で「なんにでも興味を持つことだ」という言葉が印象的だった。

面白いのか、面白くないのか、表面的な印象を追うより、対象の本質は何なのか、そんなところを見て行くことの面白さのことをおっしゃっているような気がした。

12歳で山の仕事に携わり、36災害（※）を機に土木の仕事に移り変わる。もちろん傍らには田畑の仕事があった。いずれも望んだ仕事ではなかったかもしれないけれど、それに従事して興味を注げば、見えてくる世界がある。それを彼は日常生活の中で見せてくれている。だから魅力的で、つい追いかけてなくなってしまう。オオシカ谷ではそんな背中がいっぱいある。

(※) 昭和 36 年の梅雨前線豪雨。通称 36 (さんろく) 災害。その被害の規模と深刻さにおいて、長野県災害史上空前のものと言われる。大鹿村では大西山の崩壊より 42 名が死亡。